

2022年度 須磨学園夙川中学校入学試験

国 語

第 3 回

(注 意)

解答用紙は、この問題冊子の中央にはさんであります。まず、解答用紙を取り出して、
受験番号シールを貼り、受験番号と名前を記入しなさい。

1. すべての問題を解答しなさい。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 字数制限のある問題については、記号、句読点も 1 字と数えること。
4. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

学校法人 須磨学園 夙川中学校

【一】 次の文章は、一九八八年に刊行された、岡本太郎氏の文章の一節である。文章を読んで後の問いに答えなさい。

日本という国では、オリジナリティーを持つことが許されない。積極的に生きようと思っても、まわり中から足を引つ張られる。

それは、日本の道徳観からきている。特に徳川三百年という大変長く、しかも非常にキョウコな封建制は、たとえば、一度農民の子に生まれれば一生農民であり、商売でも豆腐屋の子に生まれたら一生豆腐を作るより手がない。そういうように自分の運命が決められてしまつて、そこから出るわけにいかない。もし出ようとすると叩かれるし、秩序をみだす、非道徳という事で置きされる。だから、自分で運命を拓いていくことができない。町人は町人、武士は武士、しゃべることもすることも、生活の行動範囲から、考える範囲まで全部決まつてしまっている。

そういう風潮がつい戦前まで何らかの形で残っていた。ただ、明治時代に入り、国家の近代化とともに、リッシン出世とか、野心家で一旗挙げて出世しようという人が出て、その時代には憧れ、ピタンになったけれども、一般の気持ちとしては、それは夢物語のこと、実際にはまず自分の分限というものを考えてしまう。自分の分限を考えた方が、他人と接する時に都合もいいし、無難に生活できた。また、日本というのは狭い国で、その中で大勢の人がぶつかり合っているから、しょっちゅう監視されており、行動する場合には前後左右にぶつかつてしまうのだ。そういうとき、諦めてしまわなければ、とても息もつけないということになるわけだ。

あまりにも独自であるということは極めてケシカラヌことであり、恥ずべきことのように扱われる。この国の風習では「長いものには巻かれろ」が常識である。この閉ざされた国、古代農耕文化以来、不変の一色の秩序を保つてきた島国の社会、つまり国全体が大きな閉ざされた社会、「村」なのだ。だから慣習にさからう、意外に思われるような発言などには必要がない。すべては言わず語らずのうちに決まつており、代々の社会秩序の中で偉いと決まつた人は無条件に偉い人。

あえて独自な表現や不協和な主張をして村の安寧秩序を乱すやつは村八分にされ、滅ぼされてしまう。古代からずっとそれでやってきたのである。

だが現在のわれわれにとつて、これは大変な間違いであるとはくは思う。いままでは、謙虚であるということが世渡りの第一歩みたいなものと考えられてきた。だがぼくの考え方では、それは非常に傲慢だとはいえないが、不遜だと思う。というのは、自分ほどのくらいの能力があり、どのくらいのことをすべき器であるかということを見極めようとしなくて、つまり、自分のことが自分でわからないのに、勝手に自分はダメだと見切り、安全な道をとつてしまう。

このように自分を限定してしまい、その程度の人生で諦めてしまえば、これは安全な一生。だが、自分がいまの自分を否定して、更に進み、何か別な自分になろうとすることには大変な危険が伴う。

そして、ほとんどの人はこの危険に賭けようとはしない。それ

は、いままでにこの危険に賭けて失敗した人がいたり、また危険に賭けない方がいいというムードが日本人全体にあるからだ。このムードに従つて、みんな自分の分限を心得てしまい、消極的にしか生きていない。ただマメに働いて、質よりも量で自分の働きの価値づけをしようというようなところがある。

こうした風潮に拍車をかけているのが、日本の教育システムではないかと思う。日本では教育というものが、何かこういう人格形成の第一条件のようになっていて。つまり若い時代、学生時代には、誰でもかなり自由な考え方ができる。そして自分の人生に夢を持っている。また欧米以上に若い人が甘やかされている。学生だ、まだ子供だと甘やかされているうちに、つい遊んでしまう。だから本当の人生の勉強ということや、自分が本当に勉強したいということをやあまり勉強しない。

I そんなことをするよりも、学生時代には学生時代の形式的な勉強さえしていればよいというふうに考えている。

人生については、いずれ学校を出て、実社会に出てからにしようなどと思っている。そして実際に実社会に出てしまうと、会社とか勤め先では人生的な勉強をする必要は全然ない。会社内の事情に一応明るくて、上役、同僚と、いずれくる後輩という人間関係さえ適切に処理すれば事は足りる。

II 自分は何か生き甲斐を、などと考えるのはバカみたいに思える。会社は忙しい、夜帰つてくると疲れてしまうし、そのうち女房を持ち、子供などを持つてしまうと、型通りの家庭生活に入つてしまう。

大体においてここで人生を諦める。よけいな本を買つて、形而上学的な問題を考えたつて腹の足しにもならない。それよりもゴル

フでも上手になろう、などと考えて、ストップしてしまふ。

夢を見ることは青春のトツケンだ。これはなにも暦の上の年齢とは関係ない。十代でも、どうしようもない年寄りもいるし、七十、八十になつてもハツラツとして夢を見つづけている若者もいる。

だから年齢の問題ではないが、青年の心には夢が燃えている。だが、そういった夢を抑圧し閉ざしてしまふ社会の壁がこの現代という時代にはあまりにも多すぎる。

ぼくは口が裂けてもアキラメロなどとはいわない。

それどころか、青年は己の夢にすべてのエネルギーを賭けるべきなのだ。勇気を持つて飛び込んだらいい。

仮に親の顔色をうかがつて就職し、安定を選ぶとしようか。が、それが青年自身の人生なんだろうか。俺は生きた！といえる人生になるだろうか。そうじゃないだろう。親の人生をなげるだけになってしまう。そんな人生に責任を持てるだろうか。若者自身のほんとうの生きた人生には決してならない。

自分自身の生きるスジはだれにも渡してはならないんだ。この気持ちをつらぬくべきだと思う。

どこにも属していないで、自由に自分の道を選択できる若者だからこそ決意すべきなんだ。新しく出発するチャンスなのだから。夢に賭けても成功しないかもしれない。そして、そのとき、ああ、あのとき両親のいうことを聞いておけばよかったと悔やむこともあるかもしれない。

でも、失敗したつていいじゃないか。不成功を恐れてはいけない。人間の大部分の人々が成功しないのが普通なんだ。パーセン

本文は、裏面に続きます。

テージの問題でいえば、その九九%以上が成功していないだろう。
しかし、挑戦ちようせんした上での不成功者と、挑戦を避けたままの不成功者とはまったくテンチのへだたりがある。挑戦した不成功者には、再挑戦者としての新しい輝かがやきが約束されるだろうが、挑戦を避けたままでオリてしまったやつには新しい人生などはない。ただただ成り行きにまかせてむなしい生涯しょうがいを送るにちがいないだろう。

それに、人間にとって成功とはいったい何だろう。結局のところ、自分の夢に向かって自分がどれだけ挑いどんだか、努力したかどうか、ではないだろうか。

夢がたとえ成就じようじゆしなかったとしても、精いっぱい挑戦した、それで爽さわやかだ。

(岡本太郎 おかもと たろう 『自分の中に毒を持って あなたは
“常識人間”を捨てられるか』による)

110

注1 封建制 … 主君から与えられた土地にともなって形成される、ピラミッド型の主従関係による社会制度。

注2 秩序 … ものごとの正しい順序や筋道。

注3 分限 … 身のほど。分際。持っている身分。

注4 安寧 … 世の中が穏やかで平和であること。

注5 村八分 … 仲間はずれにすること。

注6 不遜 … 思い上がっていること。

注7 なぜ … 「なでる」という言葉がなまったもの。

100

105

一の設問

問一 線部X・Yの本文中での言葉の意味として最も適当なもの、後から一つずつ選び、番号で答えなさい。

X 足を引っ張られる

- 1 周囲から実力以上の期待をかけられる。
- 2 どれだけ用心しても失敗してしまう。
- 3 他人にものごとの進行を邪魔される。
- 4 敵に出し抜かれてびっくりさせられる。
- 5 相手に自分の失敗を責められる。

Y 息もつけない

- 1 他人に助けてもらえない。
- 2 気持ちが落ちつかない。
- 3 我慢の限界に近い。
- 4 油断ができない。
- 5 息苦しくて辛い。

問二 I・IIに入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。ただし、同じ番号は一回しか選べません。

1 しかし

- 2 だから
- 3 つまり
- 4 むしろ
- 5 また

問三 「日本の道徳観」(線部ア)とありますが、それはどのようなのですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 生まれながらに定められた身分や生活を守ることが当然であり、それに背こうとした者に対しては制裁を加えるべきであるという価値観。

2 境遇によって決められた運命に従って生きることが当たり前であり、自分で道を拓こうと試みることは無意味であるという価値観。

3 どのように生きるかは生まれた時から決まっており、身分を変えようとすることは、法を犯すことと同等の悪事であるという価値観。

4 定められた運命を生きることが、秩序を乱さず生活することであり、それを守れない者は非道徳者として自分の運命から逃れてもよいという価値観。

5 自分に与えられた運命を受け入れて生きることが道徳的であり、生活や思考まで決められていることが当たり前であるという価値観。

問四 「村」なのだ(線部イ)とありますが、ここで使われている表現技法は何ですか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 倒置法
- 2 隠喩(暗喩)
- 3 直喩(明喩)
- 4 体言止め
- 5 擬人法

問五 「大変な間違いである」(線部ウ)とありますが、どういうことですか。八〇字以内で説明しなさい。

問六 「形而上学的な問題」(線部エ)とありますが、「形而上学」とは「経験や感覚を越えた観念的なものについて研究する哲学のひとつ」のことです。これは、何の具体例として挙げられていますか。本文から十字以内で書き抜きなさい。

問七 「『俺は生きた!』といえる人生」(線部オ)とありますが、そのような人生を送れない人間が多い原因は何ですか。本文から、十六字で書き抜きなさい。

問題は、裏面に続きます。

問八

「それで爽やかだ」(――線部力)とありますが、筆者が
そう考えるのはなぜですか。その理由として最も適当なもの
を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の夢を叶えることで初めて新しい人生を手に入れるこ
とができるのであり、失敗を恐れて挑戦しない者は、つま
らない人生を送るだけで、心残りが多くなってしまうから。
- 2 失敗を恐れずに自分の夢に向かって精一杯努力した者は、
結果として不成功であつたとしても、やりきつたという清々
しい気持ちで次に進むことができるから。
- 3 失敗を恐れずに、自分の夢に向かって精いっぱい努力を尽
くしたという事実の方が、成功したかどうかという結果より
も、人生において重要であり、重圧感を覚えるから。
- 4 夢を追いかけて失敗すると後悔することもあるかもしれな
いが、人間は常に失敗することが当たり前なので、もう一度
新しい気持ちで挑戦できるから。
- 5 何にも挑戦せずに不成功な人生を送る者ではなく、夢に挑
戦して失敗した者にだけ、新しい輝きのある人生を送ること
が約束されており、軽やかな気持ちで生きられるから。

問九

本文の内容と一致するものとして最も適当なものを、次の
中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 日本は狭い国なので、お互いの監視の目が厳しく、それゆ
えに自分自身の身の程をわきまえて行動するほうが、他人と
関わる際にも都合がよく無難に生活ができる。
- 2 日本の教育システムでは人格形成が第一条件とされている
ため、形式的な勉強さえしていれば、自由に自分の夢を追
かけることが認められている。
- 3 日本で夢を追いかけるのであれば、実年齢は問題ではなく、
年老いたとしても青春時代を生きているかのように、自分の
目標に向かって尽力することができる。
- 4 日本では明治時代に入り、運命を変えようと試みた者がい
たが、それは普通の人から見れば絵空事であり、どうしても
自分の分限を考慮してしまうものである。
- 5 日本には危険を冒してまで夢を追いかけないほうがよいと
いうムードが全体にあり、どれだけの量の仕事をしたかとい
うことが最も重要であると考えられている。

問十

線部 a のカタカナを漢字で書きなさい。

【二】 次の文章は、戦時中、主人公が女学校（現在の中学校）三年生の時、東京大空襲が起った際のエピソードである。B 29 という飛行機が繰り返し爆弾を落とす中、炎から逃れ、土足のまま家の中を逃げ回ったが、幸いにも家の周辺は焼け残った。その翌日の出来事から話が始まっている。これを読んで、後の問いに答えなさい。

さて、このあとが大変で、絨毯爆撃がいわれていたこともあり、父は、この分でゆくと次は必ずやられる。最後にうまいものを食べて死のうじやないかといひ出した。

母は取っておきの白米を釜にいっぱい炊き上げた。私は埋めてあったさつまいもを掘り出し、これも取っておきのうどん粉と胡麻油で、精進揚げをこしらえた。格別の闇路のない庶民には、これでも魂の飛ぶようなご馳走だった。

昨夜の名残りで、ドロドロに汚れた畳の上にうすべりを敷き、泥人形のようなおやこ五人が車座になって食べた。あたりには、昨夜の余燼がくすぶっていた。

わが家の隣りは外科の医院で、かつぎ込まれた負傷者も多く、息を引き取った遺体もあった筈だ。被災した隣り近所のことを思えば、昼日中から、天ぶらの匂いなどさせて不謹慎のきわみだが、父は、そうしなくてはならなかったのだと思う。

母はひどく笑い上戸になっていたし、日頃は怒りっぽい父が妙にやさしかった。

「もつと食べろ。まだ食べられるだろ」

おなかいっぱい食べてから、おやこ五人が河岸のマグロのようにならんで昼寝をした。

畳の目には泥がしみ込み、蘭草が切れてささくれ立っていた。そつと起き出して雑巾で拭こうとする母を、父は低い声で叱った。

「掃除なんかよせ。お前も寝ろ」

父は泣いているように見えた。

自分の家を土足で汚し、年端もゆかぬ子供たちを飢えたまま死なすのが、家長として父として無念だったに違いない。それも一個人ではどう頑張っても頑張りがようもないことが口惜しかったに違いない。

学童疎開で甲府にいる上の妹のことも考えたことだろう。一人だけでも助かってよかったと思っただか、死なばもろとも、なぜ、出したのかと悔んだのか。

部屋の隅に、前の日に私がとってきた蛤や浅蜊が、割れて、干からびて転がっていた。

戦争。

家族。

ふたつの言葉を結びつけると、私にはこの日の、みじめで滑稽な最後の昼餐が、さつまいもの天ぶらが浮かんでくるのである。

【エ】 はなしがあとさきになるが、私は小学校三年生の時に病気をした。肺門淋巴腺炎（りんぱせんえん）という小児結核のごく初期である。

病名が決った日からは、父は煙草を断った。長期入院。山と海への転地。

「華族様の娘ではあるまいし」

親戚からかけ口を利かれる程だった。

家を買うための貯金を私の医療費に使ってしまったという徹底ぶりだった。

父の禁煙は、私が二百八十日ぶりに登校するまでつづいた。

広尾の日赤病院に通院していた頃、母はよく私を連れて鰻屋へ行った。病院のそばの小さな店で、どういうわけか客はいつも私達だけだった。

隅のテーブルに向い合って坐ると、母は鰻丼を一人前注文する。肝焼がつくこともあった。鰻は母も大好物だが、

「お母さんはおなかの具合がよくないから」

「油ものは欲しくないから」

口実はその日によっていろいろだったが、つまりは、それだけのゆとりがなかったのだろう。

保険会社の安サラリーマンのくせに外面のいい父。親戚には気前のいいしゅうとめ。そして四人の育ち盛りの子供たちである。

この鰻丼だって、縫物のよそ仕事をして貯めた母のへそくりに決っている。私は病院を出て母の足が鰻屋に向うと、気が重くなつた。

鰻は私も好物である。だが、小学校三年で、多少ませたところもあったから、小説などで肺病というものがある病気がおぼろげに見当はついていた。

今は治っても、年頃になったら発病して、やせ細り血を吐いて死ぬのだ、という思いがあった。

少し美人になったような気もした。鰻はおいしいが肺病は甘くもの悲しい。

おばあちゃんや弟妹達に内緒で一人だけ食べるといふのも

【Ⅰ】の다가【Ⅱ】。

どんなに好きなものでも、気持が晴れなければおいしくないことを教えられたのは、この鰻屋だったような気もするし、反対に、多少気持はふさいでも、おいしいものはやっぱりおいしいと思っただような気もする。どちらにしても、食べものの味と人生の味とふたつの味わいがあるということを初めて知ったということだろう。

今でも、昔風のそば屋などに入って鏡があると、ふつとあの日のことを考えることがある。

暗い臙脂のビロードのシヨールで杓元をかき合せるように

しながら、私の食べるのを見るときもなく見ていた母の姿が見えてくる。その前に、セーラー服の上に濃いねずみ色と赤の編み込み模様の厚地のバルキー・セーターを重ね着した、やせて目玉の大きい女の子が坐っていて、それが私である。母はやつと三十だった。髪もたつぷりとあり、下ぶくれの顔は、今の末の妹そっくりである。赤黄色いタングステンの電球は白っぽい蛍光灯に変わり、鏡の中にかつての日の母と私に似たおやこを見つければと思うとも、たまさか入ってくるおやこ連は、みな明るくアツケラカンとしているのである。

本文は、裏面に続きます。

母の鰻井のおかげか、父の煙草断ちのご利益(りやく)か、胸の病の方は再発せず今日に至っている。

空襲の方も、ヤケツパチの最後の昼餐の次の日から、B 29は東京よりも中小都市を狙(ねら)いはじめ、危いところで命拾いをした形になった。

それにしても、人一倍食いしん坊(ぼう)で、まあ人並みにおいしいものも頂いているつもりだが、さて心に残る『ごはん』をと指を折ってみると、第一に、東京大空襲の翌日の最後の昼餐。第二が、気がねしいしい食べた鰻井なのだから、我ながら何たる貧乏(びんぼう)性かとおかしくなる。

おいしいなあ、幸せだなあ、と思って食べたごはんも何回かあったような気もするが、その時は心にしみても、ふわっと溶(と)けてしまつて不思議にあとに残らない。

釣針(つりばり)の「カエリ」のように、楽しいだけではなく、甘い中に苦みがあり、しょっぱい涙(なみだ)の味がして、もうひとつ生き死ににかかわりのあったこのふたつの「ごはん」が、どうしても思い出にひつかかつてくるのである。

(向田邦子「ごはん」による)

105

注1 絨毯爆撃 … 無差別に行う爆撃(ばくげき)。

注2 精進揚 … 野菜を揚げたもの。

注3 闇ルート … 不正な商品がやりとりされる経路。

注4 余燼 … 燃え残り。

注5 藺草 … 畳表(たたみおもて)の材料にする植物。

注6 学童疎開 … 戦争中、空襲を避けるために農村などに子どもを移住させたこと。

注7 甲府 … 山梨県にある市。

注8 昼餐 … ごちそうのある昼食。

注9 小児結核 … 咳・発熱(せき)を伴う感染(かんせん)症。

注10 華族 … 明治以降の特権的階級。

注11 広尾 … 東京都にある町。

注12 臍脂(せいち)のビロードのショール … 濃い赤色の織物で作られた女性用の肩掛け。

90

二の設問

問一 「取っておき」(――線部ア)と意味が異なる語を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 温存
- 2 秘蔵
- 3 保持
- 4 特殊
- 5 確保

問二 「父は泣いているように見えた」(――線部イ)とありますが、その時の父の気持ちはどのようなものだったと考えられますか。八〇字以内で説明しなさい。

問三 「みじめで滑稽な最後の昼餐」(――線部ウ)の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 戦争で食べ物がないからと、自分でとってきたわずかな蛤や浅蜊を取り合いながら、家族でがつと食べた物悲しい食事。
- 2 戦争で明日にでも死ぬかもしれないからと、やけになった家族がみんなであるだけの食べ物を用意して行った、贅沢な食事。
- 3 贅沢を知らない家族が、粗末な食べ物を御馳走だと思って大喜びで食べたという、哀しいけれど忘れられない思い出の食事。
- 4 最後になると覚悟して、ありったけの食糧を用意したが、死ぬことの恐ろしさには勝てなかった、思い出すと情けない食事。
- 5 苦しい気持ちを少しでもごまかすために、以前のような贅沢な食事を再現しようと、家族みんなの工夫で作りに出された食事。

問四 「はなしがあとさきになるが」(――線部エ)とありますが、どういうことですか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 この重大性から、まず病気の事を言うべきだったのに順番が逆になったということ。
- 2 私が病気になったのは戦争の前だが、その出来事の説明が逆になってしまったということ。
- 3 思い出を語る上で大切な出来事なので、あらかじめ前置きをしようということ。
- 4 戦争の話をもっと詳しくしたいのだが、混乱するので、次に進もうということ。
- 5 読者に分かりやすいように、どの時期の話であるかを明らかにしようということ。

問五 「親戚からかげ口を利かれる程だった」(――線部オ)とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 さほど重病でもないのに、大げさに騒ぎ、仕事まで辞めて娘を看病しようという、父親の溺愛ぶりに対してあきれていたから。
- 2 娘が心配とはいえ、金持ちの真似をして療養しようと、体裁を取り繕う父親の態度に、さすがの親戚も嫌気がさしてしまったから。
- 3 一人娘のためになりふり構わず、治療にお金を費やす行き過ぎた父親の愛情を理解しながらも軽蔑し、不快感をあらわしたから。
- 4 娘の治療のために、出来る限り手を尽くそうと、身分不相応な療養をさせる父親のたいそうな行為を親戚が苦々しく感じたから。
- 5 必要以上に娘に気を遣う父親の姿を見ていられず、本来あるべき親子の関係とは異なっているのではないかと、見下していたから。

問題は、裏面に続きます。

問六 「気が重くなった。」（――線部力）とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 鰻が食べられるのは嬉しいが、それほど自分の病が重く、今度こそ、これが最後に鰻を食べることになるかと不安になっってしまうから。
- 2 先の長くない娘の運命を実感し、鰻を食べさせることで娘の気持ちを一時でも明るくさせようという母親の気遣いが負担だから。
- 3 金銭的にゆとりがないにも関わらず、娘を思っで無理をする母の愛情がうれしい一方で、申し訳ない気持ちになっってしまうから。
- 4 母も大好物の鰻を自分一人で食べることに申し訳ない気持ちを感じていたが、鰻を食べられることに喜びを隠せない自分に嫌気がさすから。
- 5 どれだけ美味しいものを食べることができても、自分に対して死を宣告されたも同然の行為と受け取り、不快だと感じたから。

問七 Ⅰ・Ⅱに入る語の組み合わせとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|-----|---|--------|
| 1 | X | 悲しい | Y | くすぐったい |
| 2 | X | 嬉しい | Y | うしろめたい |
| 3 | X | 切ない | Y | ほろ苦い |
| 4 | X | 楽しい | Y | よろこばしい |
| 5 | X | 空しい | Y | ほこらしい |

問八 「このふたつの「ごはん」が、どうしても思い出にひっかかってくるのである」（――線部キ）とありますが、「ふたつのごはん」がいつまでも忘れられないのはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 おいしい食事であっただけでなく、戦争や病気の記憶とともにあることで、人生の苦しさも感じたものだから。
- 2 優しい両親に恵まれた幸せな人生の中で、家族にとっての暗い思い出と結びついている数少ない食事だから。
- 3 大人である両親が涙を流す姿が、幼い自分には理解ができないほど印象的な出来事だったから。
- 4 戦争ですべてを失ったために、貧しい生活をしている頃は、贅沢な食事が唯一の楽しみであったから。
- 5 いっ死ぬかもわからない環境で落ち込んでいた自分を勇気づけてくれた希望の食事であったから。

問九 この話に登場する「父親」はどのような人物ですか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 世間体を気にし、家長である自分の威厳を非常に大切にする昔かたぎの父親。
- 2 涙もろく優しい気持ちにあふれ、感情に流されてしまいがちな父親。
- 3 家族を大切にし、父親の役割を果たそうと時に大胆に行動する情のある父親。
- 4 主人公の「私」を溺愛し、行き過ぎた行動も気にせず、非常識に振る舞う父親。
- 5 家族のためにはなんでもできるが、常に自分の無力さを嘆いている弱々しい父親。

問十 この話の特徴について説明したものとして、**適当でない**ものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 時代背景を見事に描写し、時代の中で苦しみながら生きる人々の姿が浮き彫りにされた作品である。
- 2 家族のつながりが、時代背景や登場人物の事情を通して見事に描かれた作品である。
- 3 日常生活のありふれた出来事が、時代背景を通してリアルに伝わってくるような作品である。
- 4 会話を効果的に使い、登場人物の性格がよく伝わってくる作品である。
- 5 表現描写を工夫し、情景が臨場感たっぷりと伝わってくる作品である。

[illegible]

受 験 番 号			

名前	
----	--

5



2

--

